拾為聖典 十

へ 5
1217
10

へ5
1217
(10)

早稲田大学図書

長門　　祇田

經文紫　　孤雲園

月為や墓所もしらぬ花　　野秋

松の敷しく所菱の屋　　夏花

さまれし喰の栗北湯も経ぬて　　素堂

雑中さも刺刺ハ　　冬秋

為らし硫黄のうる　　不言

ちる濃の初夢　　琴坡

築筑の方に琴くらべ　一　安吾
雪とまがふもとうく遠　桜　芦吹
月にもぬるる物ゝ多　縄手　望月
八十八夜ゝ　つゝ　つる
侍あり　者の程　撰ぶ　文史
信代の　りたく　長助　芦洲
二　元禄の頃　宝永　の頃　芳梅
雪花の多い　稲高の神　李渓

都蔵で出会ふ　小雪　青城
梦あさ　雨　頃　雪　保来
梅ゝ　雪ふ　ふわ　ふれて　赤領　正子
侍ん　初ふ　侍ん　出れ　吐孝
春の　ふ　春の　ゝ　月の　酒　砂月
ゝ　ゝ　春ゝ　ん　清兵　兼松　李才
ら
侍の　ゝ　二里や　ゝ　軍ゝ　ゝ　一茶
侍の　雪ふ　雪の　船　侍朴

世の中を咲き初めしより　石里
桜咲きもらるる春　孝

名残

名残とて残ぬるしるの雪　可吉
桜の中を探るしるべの山　砂月
雪踏やあるべき所ふみしだき　素雀
名残の月の笑ひのもの　石里
名残とて春の雪もうらくと　琴坡

元とはく場の例よ事の邪　宵秋
金盞と咲くまれよ人言　砂吉
笠揚て和水菜雑や夏の月　里柱
雑百合や巻のうちより咲いく　孝格
菜柳や蔵を家の作り物　文史
蔵巻の猫も寝りう麦の秋　正子
蕎麦や新水に柳の昼日も　芦吹
風流て年不足せう名残の言　芦路

心任や忘れうしもものの子　特　青城
一夢よ時りくるや郭公　玄　李青
おもこしの雨の夢添ふ蛍の　李渓
涼気しるとふもやはり　世　性る
蹴時や秋来てはの夢　性李
笑ふ夢の世もむみも月入ぶ　深来
涙火の涼ふ降りて義涼し　一世来
夢しられ花の宿世行うも　路秋

人里のかりそめくれや　特半　未鼓

和久

六月表

涼風の夢秋ふるまひし　得和考　しれ
時くや反嘯ふ泉立の特　支左
思ふふくくきの方とありて　一蓋
ふりの世ふの特ふ考　光路
ふるのも時ふのも又月ふれや　翠二

社の幸湯の名も稲荷山　松翁

名塚

結び出て様々の歌　一茶

菜のむやみうまし　夕凪

明の日は何ぞ紙子の衣　白雄

惜しまるる秋の名残かしこ　二

作もけい月言葉ぐさ　安園　一鳴

紙子脱ぎ捨て明日の衣さぬ　松翁

二の巻表　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

津久井

白くふ明くるを中の秋　月今舎　支尼

蛙の顔いぬ　麦　の郷

そのむかし書翼勤めしも　秋の庭　支尼

紙ゝ明くる琴の音　白の石

山陰うふ月も乗りてけり　影咲　海志

宝の寺のうふ茶所にて　重

忘源

帆みも吹かぬうてて波の風涼し　霧嶋

世ふ心了はんてもまとは乱るふ　伯石

掃きし寺清きのふるまよりきの吉　海志

初雪や鳴もぬうしぬ高て花い　友尼

八句表

漁弘

岩ふ引いかんの注連うも芸の吉　紫梅

[illegible]

雑部三十一文字ふ寺と遅て　麦花

[illegible]　書の[illegible]　桜山

遅くふ鶏も花人て鶏も鳴お　春秋

又かうきとれ織芸作く　珊瑚

花人ふるさいやいふ月の櫂踏子　秋也

有後うう吹日ふ夏う入　琴糸

名所

見渡の吟ぜぬ事よ見渡せば　侍　桜も

里人知て又ゆかむくやむ　口　雪秋

色紙や垣根細き下紅の　女　て散

行のゆくも一日の嘆や重陽　紅葉

ひろふまもなく垣ふ木の実哉　野菊

吹花沢山雲ふ秋の風　武門　秋也

風や篠竹　口　芭蕉

八月十五夜

安図

月新も清ふくまなく浦浪　松月葊　義仙

眺ふ山さと沼壹度　変化

信あるを神の表このつゝみ　路通

雲もあるぬ名月　紅日　来国

遠くも方法のまれも京級坂　孚水

素人風の聲も又　稚　潭子

名にしおはゞ世の中にあらぬ物

思ふの夢のよそ路かな　　行平

公深

春や雪ふるあふ坂の関路

きゝつゝ之に成ぬる日の月　　西行

はむしゝや兎念ふ遠ふる若草

法まめて来ぬ仏まかは本樣ふか　　澤水

戸さし孫と成ぬるやゝ夏ふる

ふる水

為朝やまゝ相手ゝ成ぬ姫の墓ゝ　　素紀

去天

八白表

二人共ゝ成ぬ法れ名ふ　　深月園　芦夕

年ふ紀ゝ河のよ殊枝　　更尼

仮名ゝの地ゝ新枝ふ付て　　可観

次ゝふ実付り世　　不夕

囲りれて茶羅ゝの分ふ多り　　未水

常のすむも浅沼の蛙　麦杜

行く末を蛙よ月の近山哉　藻雪

比良山を越て野の麦く　子

石塚

鶯こやむもみ妙の蛙　赤れ

田もれ分る塚の蛙　杜芳　藻雪

芳年や蛙も鳴と高ふまと　新　可夕

笑ふ山蛙れ鳴や桃の色　麦杜

飛蛙解くるもあもちる柳ふ　可雅

鶯の岡のちきれくや秋の風　芳夕

月　長房

五十韻　一字千金　菓舎

夕雲恋雪りや恋よ半北角

いな屋も月よ塚ゝこの浦　麦杜

杜言の鳶帽子袴衣統拾て　文塚

ちゝ月と一茅屋ちきく　天杜

逢坂の市の俤もすんでなる　一枝
咲ふ風の寒のかすみ　失あ　語孝
さらしこそみて奏の寒先庚　蓑柳
雨よりあり祝をんの村雲　五川
飛鳥川流の尾越の鶴の連　風好
何の水の大流の達戸忌の神　深行
ひとめ幸を葉ちを親　一雪
幸用を寸ふ三川五年七孝　庵雨

何ちこちと多い雅波の橋善法　雨礼
おはん昭義と云伏　雪友
ぬきくのもとんとと押てやり　業枝
打も俄よ冷る　式雪　柳化
を泡て雪よ細月の近ち分　牧雨
雪俤りもよめれ法　芸筑
業代まて添て雪れ餘の代　一法
笑の曙蓑の今よくいたく　松江

岳よ白ふ雲吹の河霧のうち　因古

只秋の暮りさ夏裏紅葉　秋路

二

冴うえるゆく小夜の山ふかり　この松

私の務ふ去来も及ぶ　砂花

八重もまえうえ散れく引ばくき　松窓

仕方山　我孫へばとく　椰雪

時ふても庵廣あれを大ふかり　芳烟

古事とうえを遂ふ凡の名　芦舟

もうふう数うう数松ふ年の葉も　子来

稚王も妓女も訪れ女子諸て　嵐吉

庵ふう寄りまりてりふうえ生　凡和

遠近ふ咲る子ん　梵　雄　羣月

石切の鑿も吹華も撫て　琴市

悟乳寺寺すんうちとう帰り　北鮫

鶯や移ふと月ふかうちて咲る　文来

すえ庵くとうえ生の寺　一渡

呈 初めて名みー 拾拾ゥ系と ゥ ち 株
紅の寄りの 弓矢 八 幾 古 霞
打訂、皆の 座ゥ ぬ 紙 を ゥ かり 素 れ
所 く ゥ 所 の 海 り わ と 離 ち
年 号 も 天 平 あ れ ち ん こ と 渡 橋
実 ん 和 ま お 目 ゥ か り ま ん 樂 之
退 徒 と 祖 ゥ ゥ ゥ て ま ゥ ま れ 白 依
盧 も 酒 ま ゥ も 海 ゥ 幾 あ れ 孤 ち

此上も修れ申ぬれ〳〵雪み月 如亭
清 紙 雄 も 居 も 引 く 山 麓 拾月
をとゝ沼ふ おのく 徒 へ 屋 く 祭 芸 能
拝 へ い 蕎 も 行 ゥ り 清 ゥ ゥ 業 始
初 ふ め て 実 ち 屋 も 此 の 御 代 乙 情
茅 里 年 等 百 千 鶴 ま 年

其二八白表

岩 角 も 咲 和 ゥ け て 苔 の 杉 松 梢 飯 立 調

注れても汲むに細き　清　流れた
ものとまれを屋の代と楽して　六節居
まさちゝてくあるなたし　亀岡
の漕ゝ吹通のを　神風て　加茂へ
二度の法とめ北の方　裏北
稚らゝ月器さんの手こゝろ　堂路

流るゝ戸の子　母と　手
芸三三ッ物

流るゝ　ゝを松のうちや　稚しゝ　三樣歌　好家
流れ人目をちゝぬ松　新　流れ
知ゝぬ　赤ゝ　神の　ゝ　ふて　む北
芸四六白表
水面や　月の白ゝを　河の　て　旭琴園　文路
さゝて　ゝむ風　北の　面　流れ
丑一　ゝて　屋一口　北　徒ゝけて　業合
適て　又　沢かゝ　月の　北　む先

きらきらと秋の淡き月の影　彩度

秋深き夜のしらべ　乙　七彩

乙訓

川水の流れは秋の音のみ　六節会　角笛

岩もかすかに秋の青田風　加茂祭　角笛

雁なきて書よみねやの中　三社託宣　琴

秋い更て琴やしらべの月　女　笙

菜摘や幕打いまさまふる　口　七絃

岩もきらきらと又絶るる瀧中山　喜撰

菜摘みしらべや雪よ松んと鳴きまさる　子東

菜摘の笛きらきらと雪の気　天満宮

川秋や新よ鳴しし菜子此程　文路

ひらひらまきしのとふり雲高峯　宗彩

和泉の立琴きらきら廣し　玄の月　玄昭

海乙女一刷毛引き雲　気　板光

書の影やいとれのみて井戸　風雅

えて見る位まるよ四ツ位ゝ和
ほとゝぎすの声聞く雨の夜　路書
年のゝえよ新しく何ゝ迄この秋　古東
姫火や池蓮の花の行きゝ来の果　一清
吉野さくらの花の盛りや春時雨　巴雨
紅葉一て嵐吹ゝ散ゝ落ふ書　嵐吉
見るほとゝふ散くあるよ美雲この九　侍
淀りあて潜り沖の深とうれ　吉様
　　　

河岸の呉い秋の深さ　波鶴
春もふる咲れ物や春よ菜く　松江
俳り法えを忘れ居さ　一嘉
初てにしもあり深て紅葉の紅　芦舟
気あるひのうかりてる張る雨　芳烟
川もかり青の住ある雪は氣　樂之
を春や人の夜月をかるる　秋深の
きりて咲を人もあるふる月今青　日　離香

雪ハ春るる下とを蕗り物の在　一渡
ちり蕗て色ハみ之の石葉氣　羅宇
月歩んて辛を帰りり厂の夢　この松
色紙ゝ岩ハ色やとる清水ふ　月行
ゝるる又月代迎ふ歩ゝを氣　長萩
孫のるや咲ちゝて孫の糸　白信
ゝうふや白氣毋ハ糸ゝ賦り麻　秋姫（タケヒメ）
友柳やもゝと待ふ春の寒　浦花（ハクフ）

かゑやゆめよりきえぬれたる　ハタ　桃里

夏刈恵嶋も涼しやまわるし　ロ　素れ

うの立ぬきのうとれこの邪　一枝

うとめしハ吟さきつ波の嵐ル　義柳

為新やうるハ西立張此岩　文葉

里下りの夢ふ仙人ロ傘ふ　花西

邪の都や夏ふハきゆるふ波と　園古

雲立て立ぬ立るしりふの月　乙惜

うしうあやあかハ此弱青よ　一字奉　菜舎

うやゆ歳くく人口ゆうとをれも

古稀ふ為んくきれく雲ハの秋と

ゆふ為めて家ふ一石深と紅花と

其敬を生流かゑ弱うう旅人のうし

めと納て

雲ふ為ふ赤ふ此文母ふ其の雨

と自ふ解西ふ雲て雲ふ美人の

侍ふと行めふを私漢ゆ美塚ふ

名財を人やゆ　一字奉　菊舎

ふふ行ぬ下ふ行ふ苦此赤

赤ふ妙ふる孝成稽ル塚　夏亮

右八世北條氏康の相模国小田原城を攻め落し
意味深長なる句なり

同詠

紙子行　芳野金陵子輔

京藝や山れの月を形ゝ以
伊豆の月又は石の絵ゆ甚寒　麦丸
世事又原野も乱れ利て　五也
咲ゝ猫の村ゝ来れ　妙角
宝成の淵んゝ仕也地　乃柳

[illegible]
[illegible]
[illegible]

双紙うつすとて白浪　素蓮
きぬ〳〵に入梅雨の雲まくら　龜峰
葉ゑ〳〵七里和尚を慕ふ　秋雨
不忍池の蓮の見物歌の知れ掛り　花月
淺いうたうの〳〵ふかい　左蘭
明よりの雲と潜る月の影　文淵
夢よ拍子木の音の淋　白雪
拍子木を抱くかの人の名　春湖

酒あり後の楽しみ　接　接　宰雲
陽く事不幕し故て春の山　宇牡
百ふ鶯の古寺の山　代　鶴額
　　長二八句表
幕中の月咲く外に筆く春　嘯月亭　羅砿
路次下結あり沢月の夕暮　雲左
ぬんくと独味噌の鳥鳴らして　子輪
神代い和尚寺の中　里杜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

主の中秋はよはうてもて柳ゝ　長路
むかしちるゝ木ゝ　松繁
白ゝ月　柳原　遠山
廉少子　山寺の清きぬ　実我
実別ゝ　秋や月　再我
嘆ゝ　家　松ゝ　茅亡
泊　秋　下りて　清かゝ　又渓
外の　や　ゝ　原　里水

新酒やひれまゝ　年　我　京渓
中秋や　庵　内の月ゝ　鶯江
名灯も深かゝ　ゝ　ゝ　秋　子城
糸菊の　月　解　秋の風　子英
月　秋　雲　ゝ　深　林雲
黒ゝ　白　池の　石灯　宰貴
名色　ゝ　ゝ　ゝ　亡緑
形下　通　猫の　里夏

夜嵐や鴨なき竹を吹一　去来

名月や市出の子共踊り　及人　徒士

年の尾もきらく〜雲を遠寒　〃　芭蕉

捨ぶちよりなく鹿の聲や深夜の清　〃　夜雪

よ秋ふ青のさびやうき世秋　素堂

其の門やうもい松と寒き咲　白雄

霜ヲ踏テ　霜を踏や活水やそめてをりり　渭水

ゆりむきを柳八重一ぢ一ぢ撓　雪松

書信い帝て京より門の梅　履霜

鐵鉢の影よぬるく夜書ものよ　秋芳

秋深き庭きく虫の鳴の音の花　素堂　〃　素堂

秋きりや寒い鳴の音の花　〃　再言

○

ちれよくるかん出一ま茶ふ　廿　也茶

試ふ故屋ぬ夜や厂の秋　〃　和歌元

寒や見来鳴く一二鶴　〃　及人　湖

君るより枝ゝ根ゝ法ゝ系 サ 志保
出代りや咲そて度々京の春 ロ ゆせ
茅系よゝい花いそて四種ゝ ロ ゆん
掃ゝ毛の中ゝ文ゝの茅集れ ロ 之貝
只五月雨今掃ゝの茅系の花 ロ ゝせ
毛ゝ中ゝ多てゝくゝ書ゝ ロ 子鶴書
秋風吹て空ゝ出ゝ雲の月 ロ 之ゝ
和の空や茅て蛍ゝ家ゝ ロ 京毋 古梅

急打や地掃ゝ おゝ下ゝの広 ロ 砂分 て系
稲つゝ戸や雁ゝ入りゝ枝ゝ中 ロ 吉れ ゝ川
石の ゝれゝ茅ゝ小雑系 ロ 京毋 みち
山寺ゝ志ゝゝかゝ時雨ゝ 蔵士東 不及
ゝゝ秋の果ゝ ゝえゝ蔦ゝ れ 吉れ 石家
掃ゝ志 掃ゝ ゝ咲ゝ木樵系 京毋 清雨
山の中ゝ広ゝ ゝて ゝれ 風留 志ゝ 志星
系萩や掃ゝ上ゝ解かゝの縄 ロ 子柳

秋のうしほの末深き口の移り　去来　古香

遠方や干潟入江の年　〃　逸志

口芋や坪の葉ぬれ咲く稀れ　〃　宇陽深　乃耕

鶺鴒と共ゆくゆくの小石ふる　〃　此竹

柳うゑて帆柱ふる入江の面　〃　雲曉

ちりぬるもの古葉やあまた　〃　雨冷

涼しやゆ神さぶ戸の移りゆく　〃　徒然

青葉しの末濁れの流れふる　〃　樞谷

塚ーさや淡ーぬるれ　ぬるひ　宇陽深　砂丘

葉しさや淡ぬよ移る網の青　〃　蓮月

坊主や葉もほるるの葉て咲れ　〃　故人　乃

吾うけの葉張かくえて望吾ふ　〃　紫秋　枝乙

赤さよ月のかさーや色　踊り　〃　蛙形

気とさるぬ牛のあられや秋蟬　〃　之墨

我如ふ葉て乗る　故塚小　虎来

ぬり葉ふ武ふ又えてりての秋　〃　夫秋

うてなれは雪と半分年は市　黎時居子撮

日

東言寮

欽仙行　松風会素琴

柳ちる中流きりて春る水の色
霧も薄し月の気風　更た
張立の絃不絶ゑ　祝うれて　奏之
思い切て氣拂表る　三曉
秉す蒼ゑ文を繰り　可拍

浦ゑきれ以不而を雲れ　井蛙
乳をとる緑ゑ被成紅也　藻市
美の分ゑ成笑く　文雄
おもゑ明るう月然の文月　雨　鶯風
京新れ　ゑ小鳥の峠　芸梅
掛ゑ振り　も和為い独　云　箕一
色上ゑ何而へ切　湛言
ゑ行不牧ゑ也東和も繋ゑ是　素湖

あ咲きまさる大はまぐり　美紅
うかりそうな人目の雪を思ふ夜哉　はる
寒さ分のぬり物の徒　戸
笑ひ続く恋はまぐりの爽涼　梅月
はしも中秋の夜おぼろ　清水
温泉ふけて松の葉へ気の毒　緑江
出遠よいちんいかふ先生　尊庭
行ふもかとらぬ世の中を　桃子
　　　

ふも 雁れあを秋 原の里 雪尾
う ふる 葉よ ゆと 別陽 ゆて 方佳 ゆ佳 可紀

肩 ゆ 移 ゆ せて 鳴 を 湯 ゆ 拾 白
横 ゆ ふ き 紀 き ゆ ふ ゆ ふ ゆ ゆ ゆ ゆ 美 ゆ
市 の 庭 ゆ ら 言 の 鳴 く 和 れ
桐 ゆ ゆ く 蔵 ゆ き ゆ ゆ 李 の 比 琴 波

葉 を 代 ゆ ゆ て 拾 ゆ ら ゆ ら ゆ 重 呂

芸二 級 ゆ 行

心 ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ん 稲 の 赤 ゆ 三晩 舎 ゆ 明

袁 を 沈 し 月 の ゆ ゆ 更 花
此 秋 い 絶 初 ゆ ゆ ゆ く う 綦 之
屋 ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ 袖 を 結 ゆ 可 仙
う 七 曲 り 八 曲 り 佳 ゆ を 九 折 其 拾
ゆ ゆ 書 ゆ り 流 石 書 舟 尊 龍
浮 ゆ ゆ せ を 火 鉢 拾 て ゆ ゆ り 之 翼 一
冴 え や ゆ ゆ 気 と 宵 中 初 ゆ り 桃 子

二月二日雪もふりてのちよ　敦之
ゆゝしたく咲のハるをゝ　孤泉
暫らく呪く目隠の赤こゝろ　琴波
鄙とゆゝ雪ふる鄙　掛雪
二
いゝさゝ波ふ　鞍（カクマリ）　とゝ　紅鍋　汲意
谷の奥まて　寒い　寒い　只帆
いつまても気に嚴太ふ恵比須　和言
をゝや男ふまれゝ　明　波明

一振りも切ふりての淑い場　扇西
まゝゝ天しゝやのはふ明ほ　まゝ
明く出る仮るの寒毛　月毛　井鉄
きゝ振しをいやゝ　孫　孫　源　文蔵
鄙衣の入院なゝもかゝゝこと
やたく仮ゝの花　ゝ姫
万代もちゝを杖やゝ　ゝの赤
續くものゝ糸ゆゝ

其三ツ物

鳴の声ハ吸うまれ　宋法

新も降りまの中也　更九

更ふるぬ松よ秋ふるの葉かれて　素琴

其四ツ物

夕雲や明ふ月　竹尺舎掛菅

ほとゝぎす成ふ山ひまむ月　更九

情あるひの後ハ分かして　素琴

名塚

口も今我業ハ也しゝ蕉の葉　松尺舎素琴

時雨の降ふ庭のうゝ言さゝれ　其祥

傾城ハ月ふ雪の月　女ほる

元ふ雪ふ月ハ物ふ多く物ふ　口　七も

口のうゝく社のうゝや明の夢　雪尾

撥雪塚の下や稲田のうれ葉　宋林

其四——名塚を東北ふ嬉り　法水

遠坂くゝ古井はまし小原　子明
松風のまくゝ絵まあくまを　慈久
いのあ書てはまあの遠の新拙　掛書
略まの中にわと雪の陸　法圭
歌のあふあ為小田の牡丹　井城
人新も　ふふ　桃とや　離北酒　女　こま
声まり雪とみる雪花ふ　口　貞江
氣移りのまふまて　春蕙の　又随

鶏　ふの　ふふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　この花
天年やまと　生れくの　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　声流
天の　ふふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　和北
あるあと月いいるし　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　仍　沼丈
氣罪ふふてまふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　琴波
いく教まてを一ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　女　佐祢
教ふふまふふの　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　海江
生の海や雪ふ　原ふて帆の切来　圭呂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寒さえ〳〵色の糸ちらく〳〵　新木
又ふるはしくいつてこそくるる　亨嬰
色さえわかふ廊なれて咲るはつか　取江
撥をあれも　ふるしの　秋　亨柳

其二　六句表

名月や新を拾らぬ野を長く　遠　表紙巻　徒磐

蕣よ二秋　初る　小　延の　変化
うるを　言ふ　ゆ　不見　めと　あらせて　仕雅

神も江も　粋は　丈の　中　亨柳
新さ〳〵と　流る　ら　寄る　波　橋　水　取江
うる　絵　秋　茶　よ　近　色　峠　この　秀

其三　三ツ物

三日月の　寒　姫　して　入り　ふり　茶　東止園　新茶
わ　は　為　茶　は　も　鐘　さ　む　寒　変化
豊　ゝ　ある　寒　り　の　法　も　張　り　よ　て　亨嬰

名　源

雪一ね蓑ほして居る柳かな　菜山園　籬未

雪ハられ雪とふりて柳かな　取江

雪ふる時く雪の音や垂の声　壺天

折れて尾をみさを能ふ鶯　随蓼

枝ゆゑも添ぬ中美こゝろ　和多

青月のくもぬ影と飯をり小　〃　李花

鶯もね鶯をしんで居るよりの恋　〃　李の嬰

被ゝ美ゝ美何ゝもあるて沙ゝ美　不及

本かゝ中岩みゝ細ゝ月和月　玉峯堂　惟義

川とゆふゝ月のかゝ陳ゝこゝろ　瓦陵堂　伍霞

赤ゝ冥懐四

治ゝ義ゝ弓ゝ月や不赤蟹

文化坊

清水三ツ物

柳ちる屋の月夜やものの梦　東三亭土文

露の世に雨降ぬ秋の雲　夏九

紅葉ちる時雨ちらて　土峯

右縁

寒日数咲ちるうるる花菜　土峯

名まてちるくの時清水　東亭

青のるハ月ふるて柳ふる　文翁